

延命袋の形につくりて、大黒柱に打つけて置、春にいたりて、おのづから落るをまちて、あぶりくらふとぞ、

〔胸算用四〕長崎の柱餅

餅は其宗其宗の嘉例に任せて搗きける、殊に可笑しきは柱餅とて、仕舞ひ一臼を大黒柱に打著け置き、正月十五日の左義長の時、是れを炙りて祝ひける。

〔筑紫紀行九〕九日卯刻頃に立出づ。○中かくて三四丁登りて峰に至る、此所は播磨と但馬との國境なり、又一丁計下ればこたわ村、人家十軒計、茶屋多くして茶屋ごとに土用餅とて砂糖餅を賣る人々と共に立て思ひもよらず土用の節物餅を喰ふことを得て、旅中ながら祝儀を欠ざるなり、

〔翹楚篇〕一公○上杉 初て入部ましませし年より、民の辛苦を知し召す爲、亦は旱つゝき雨つゝきには、田島御覽の爲に、鐵炮爲持鳥打御野遊の御唱にて、度々野間へ出て、耕作の辛苦を見給ひ、或は民家に休らひ、何かれ御物語抔し給ひて、通らせ給ひしは常の事也。安永六年九月十九日の事なり、御城の北門へ老たる嫗來りて、御臺所へ通ると云、故を問ば、約束し參らせし刈納餅。かりあり農家にて稻を刈仕廻たる祝とて、九月廿を獻すると云、されば御門々々滯なく通り、御臺所へ出て、福田餅ラモチあげもちをまろめたるもの、名付てフクナリ、一苞に、大豆粉一包を添て出しぬ、故を聞へば、御門々々にて答し、しかぐのごとし、おのくあやしみ思ひながら、其由言上に及ければ、扱は殊勝の事也、疾く披露せよとの御意にて、御取上あり、飯酒の御手當あり、金子など給はり、厚く謝して歸し給ひしなり、其の故を推尋るに、御野間の時、夕つかたの事也、老たる嫗がいそがはしく稻取仕廻居たるを御覽じ、御家中諸士の振して御みづから持運び取仕廻手傳はせ給ひて、此稻は何米なりと問給ひしに、餅米と答へ奉りしより、斯手傳たれば、さぞかりあげ餅をくれ